

私学の魂

聖学院中学校・高等学校

私学のなかでも希少なミッション系男子校として、
変わらぬオンリーワン教育と独自の「21世紀型教育」で
男子の成長を促し、世界に通じる思考力を育ててくれる
穏やかな校風に、強さと逞しさも加えた期待の進学校

東京都北区中里。駒込駅から徒歩約5分の立地に、ヴォーリス建築による趣ある校舎を持つ聖学院中学校・高等学校は、いま首都圏の中学入試で、「男子を大きく成長させてくれる学校」として、高い評価を得る存在になっています。独自の「21世紀型教育」の展開によって、世界に飛び出すことのできる英語力、コミュニケーション力、人間力を育て、いまでは海外大学に進学する卒業生も増えています。さらには、私学のなかでも先進的な「思考力入試」を導入したことによって、新たな教育や入試のあり方を模索する多方面の教育関係者からも注目されている聖学院。今回は、副校長として「チーム聖学院」をまとめる清水広幸先生と、21教育企画部長の児浦良裕先生にお話を伺いました。



副校長の清水広幸先生



21教育企画部長の
児浦良裕先生

DATA

1

聖学院中学校・高等学校

沿革	1903 (明治 36) 年	聖学院神学校設立
	1904 (明治 37) 年	聖学院英語夜学校開校
	1906 (明治 39) 年	米国ディサイプルス派の外国伝道協会宣教師 H・H・ガイ博士により聖学院中学校設立
	1947 (昭和 22) 年	学制改革に伴い聖学院中学校 (新制) 設置
	1948 (昭和 23) 年	聖学院高等学校設置。校名を「聖学院中学高等学校」と改称
	1974 (昭和 49) 年	新体育館竣工
	1981 (昭和 56) 年	新館竣工 (現中学棟)
	1997 (平成 9) 年	創立 90 周年記念事業として聖学院中学高等学校の本館、講堂の改築工事着工
	1999 (平成 11) 年	創立 90 周年記念事業として聖学院中学高等学校の本館、講堂の竣工
	2010 (平成 22) 年	中学入試に「思考力入試」を導入
	2016 (平成 28) 年	聖学院中学高等学校 110 周年
	2018 (平成 30) 年	中学入試に「難関思考力入試」を導入

校長 角田 秀明

所在地 〒114-8502 東京都北区中里 3-12-1
TEL : 03-3917-1121
<https://www.seig-boys.org/>

交通 JR山手線「駒込駅」東口より徒歩5分。東京メトロ南北線「駒込駅」3出口 (JR駒込駅南口) より徒歩7分

「人間力×思考力×国際力」をコンセプトに、 変わらぬ「オンリーワン教育」で 他者のために生きる人間を育てる

東京都北区中里。駒込駅から徒歩約5分の立地に、同じ学校法人の姉妹校・女子聖学院と隣接して建つ聖学院中学校・高等学校。同校の教育とキャンパスの象徴でもあるチャペルの塔の鐘が毎朝、近隣の住宅街に響きます。

この聖学院中高が、いま首都圏の中学入試で、大きな注目を集めています。多感な成長期の中高6年間に、「男子を大きく成長させてくれる学校」として、高い評価を得る存在になっているからです。

聖学院は、米国の宣教師H・H・ガイ博士が1903（明治36）年に設立した神学校を母体に、1906（明治39）年、石川角次郎を初代校長とする中学校を開校。以来、一貫してキリスト教精神に根ざした“唯一無二の人間教育”を実践し続けてきました。

キリスト教プロテスタント系の男子校は、私立中高一貫校のなかでも希少な存在で、いま都内では聖学院中高と立教池袋中高の2校のみ。歴史を遡れば、麻布中高が創立時は同じプロテスタント系の男子校として設立されていますが、カトリック系である暁星中高を加えても、現在では都内に3校しかない男子校のミッション・スクールのひとつです。

その聖学院教育の柱となるのは、キリスト教精神に基づく「人間教育、学習指導、体験学習」の3つで、この3本柱の中心にあるのは、「Only One for Others（＝他者のために生きる人）」の理念です。自分を生かし、他者を生かす共生の関係を求める教育精神は開校以来ずっと変わらないものであり、ナンバーワン教育ではなく、オンリーワン教育です。この揺るがぬ理念をベースに、教員が男子の成長の可能性を信



3教室分の広さに8面の大型スクリーンを配した都内最大級のアクティブラーニング専用教室「フューチャーセンター」。

じ、時に温かく、時に厳しく育ててくれる教育姿勢が、いま多くの小学生と保護者から好感と大きな期待を寄せられている秘訣ともいえるでしょう。

そうした理念と教育環境、校風のもとで、聖学院の生徒は、心身を大らかに育み、知を磨き、今後ますますグローバル化が進む世界で生き生きと活躍できる能力と自信を培っていきます。

そして2002年には、3カ年にわたる教育会議を経て「聖学院教育憲章」を策定しました。創立100年の節目を経て、その“原点”へ立ち帰る教育指針を掲げた聖学院は、この2018年には創立112周年を迎えました。

そこで新たな言葉で掲げられた聖学院教育の3つの柱は、「人間力×思考力×国際力」。創立から変わることのない“心の教育”のもとに、さらに、現在の子どもたちが生きる近未来の社会で求められる「21世紀型スキル」を育てるために、“世界水準”の教育プログラムを駆使し、独自の体験教育を工夫し続けて、次代を担う若者の育成に力を注いでいます。

アタマは学校でしっかり鍛えられる。 さらにココロを鍛えるために、 聖学院の体験教育がある

「穏やかな校風の安心できる男子校として、志望校に選んでくれる小学生と保護者が年々増えているように感じています。そういう聖学院の教育を表す切り口として、昨年から『人間力×思考力×国際力』という新たな言葉を掲げました」と副校長の清水広幸先生は言います。

「最近、子どもたちに聞く機会がありました。考える場所はどこ？ 感じる場所はどこ？と。すると子どもたちは、考える場所はアタマ、感じる場所は胸を指すのですね。アタマは学校でしっかり鍛えることができます。でも、心を育てる機会が、最近の社会では少し足りていないのが現状ではないでしょうか。だから聖学院では、体験教育に重きをおいて、心を育てていくことを何より大事にしているのです」と清水先生。

「聖学院の毎朝の礼拝では、心の糧になる言葉、良い言葉を6年間繰り返し、生徒に投げかけています。それが生徒の心の成長の栄養になると考えています。『狭い門から入りなさい』という聖書の言葉や、『キリストを身にまといなさい』という、最初は少し難しい言葉でも、日常的に触れることによって、生徒の心に種が蒔かれ、彼ら自身がその意味を考えるようになってくれます。私たち人間は弱い存在、でも、だからこそ『あなたはどうか生きるのか？』という問いを繰り返し投げ



中3の糸魚川農村体験学習では生活の原体験を通して「食」と「地域」を考える。

かけていくことで、心が育っていきます」と、清水先生は聖学院での学校生活の始まりであり軸となっている礼拝の意味を教えてくださいました。

「たとえば33年前から糸魚川市の農村で、農家にステイさせていただき農村体験をしていますが、ここで人の家に泊めていただき、人と関わる経験が、心（マインド）を育てる大きな契機になります。人と話してみても、コミュニケーションすることで初めて、自分自身の考えも立体的になってきます。これが何か自分の考えや意見をアウトプットする原動力になるのです。やはりその体験に感動がないと、人には伝えられないし、伝えることが生まれてきません。自分以外の人と関わることで、『自分の存在は何なのか?』と考える契機になるのです」と清水先生。

聖学院では最近、海外の大学への進学をめざす生徒が増え、そうした海外大学進学実績も多岐にわたるようになってきました。

「そうした生徒の進路希望をサポートするために、今年もアメリカの東・西海岸の11大学を視察してきました。そうした海外の大学で入学希望者に課されるエッセイやポートフォリオのなかで、必ず共通して聞かれるのが、MITでもハーバードでも、“Who are You”ということでした。いまの日本の子どもたちは、なかなかそれをはっきり言う、言葉で伝える機会を経験していないのです。だからこそ、聖学院では、中高6年間の“Only One for Others”の教育のもとで、それをはっきり言えるように育てていきたいと考えているのです」

一人ひとりのギフト（才能）を信じ、「井の中の賜物、大海に飛び出す」ファーストペンギンになろう！

「聖学院の体験教育では、常に『あなたは何かができますか?』と問い続けます。『君はどうする?』『あなたは?』『あなたは?』と…。それが“Who are You”という問

いの答えにつながります。人に対して、喜んで人のためにできることは何かと…。これは、先代の戸邊治朗校長、現在の角田秀明校長も、変わらず生徒に語りかけ続けてきたことです。さらに清水先生は続けます。

「いまの日本では、キリスト教や宗教教育に馴染みが薄いことから、距離を置く保護者もいないわけではありません。それでも聖学院では、11月12月の説明会冒頭には必ず礼拝を行い、保護者にも体験していただけます。しかし、生徒の朝礼も同じく、そこで伝えたいことは、決して『こうしなさい』という道徳的なことではなく、神様から一人ひとりが与えられた『ギフト（才能）に気づいてくださいね』ということなのです。クリスマスも日曜日でも母の日だって、みんなキリスト教の文化から始まったことですから、日本人にとっても特別なことではないのです」

ところで聖学院中高は、受験関係者へのアンケート回答による「生徒を伸ばしてくれる学校」という某週刊誌の特集記事では、数年続けて男子校のランキング1位を保持し続けてきました。

「何で聖学院の生徒はこんなに伸びるの?こんなに変わるの?と保護者にも聞かれることがあります。それはすべて生徒のマインドによるものだと考えています。生徒は、心が動かない(=感動しないと)自分から進んで勉強するようにはなりません。人と関わり、コミュニケーションをとることで、自分と違う意見を受け止めたり、『そうだよ!』と感じたりすることで、自分ももっと成長したいというマインドが育ってくるのです」と清水先生は言います。

そして、そうした体験は、すべて聖学院では授業が起点になっているといえます。聖学院の教育の柱のひとつ「思考力」を育てるための『21世紀型教育』とは、そうした授業を中心に展開されているものです。

自ら積極的に「学ぶ・学ぼうとする力」が重視される現在、自己発信力、問題解決力、コミュニケー



中3～高IIの希望者対象で行われるタイ研修旅行では、12月に13日間、魂を揺さぶるタイ山岳地帯での生活を体験する。



自学自習ノートを活用した自主学习を導入してから、かえって生徒の自宅学習時間が増えたという清水先生。

シヨンカは必要不可欠な能力です。そういう聖学院の独自の「21世紀型教育」の展開のひとつ「Project Based Learning (PBL) を用いた探求型授業」は、自分たちの力で課題の解決に取り組み、議論と探求を重ねる学習方法です。教師から生徒への一方通行的な学びではなく、生徒同士による双方向の学び合いによって、自分の意見や価値観をより多彩な視点から膨らませていくものです。

こうした授業の実践例(2017年)は、「読解力を磨くために演技を用いる」中1国語のスキット、「4つの思考力を鍛える」中2技術のレゴRマインドストーム、「社会課題にグループで解決策を考える」中3公民のクエストカップ全国出場、「議論を積み重ね、最適解へ導く」高2現代社会での第二東京弁護士会との協働学習など、多岐にわたっています。

最近では、3教室分の広さに8面の大型スクリーンを配した都内最大級のアクティブラーニング専用教室「フューチャーセンター」も設置し、様々な授業や学習機会に活用されています。

こうした独自の「21世紀型教育」の授業や体験学習の展開について、「21教育企画部長」という役割を務める児浦良裕先生(数学科)は、こう話してくれました。

「21教育企画部として、『井の中の賜物、大海へ飛び出す』という標語を掲げ、外部のコンテストなどにも積極的に参加を促してきました。そして、『ファーストペンギンになろう!』と生徒達に語りかけています」と児浦先生。

「井の中の賜物～」とは、「井の中の蛙」ではなく、神様によってつくられた一人ひとりの賜物＝生徒が、「大海を知らず」に過ごすことなく、広く大きな「世界に飛び出す」成長をめざそうという考え方を言葉に置き換えたコピーです。そして「ファーストペンギン」とは、他の仲間よりも勇気をもって一歩先に踏み出し、行動するマインドを育てようという意味だといえます。

何にでも果敢にチャレンジして 失敗できるうちに失敗を重ね やがて男子が成長できる苗床でありたい

「たとえば生徒がいろいろな場面でファーストペンギンになろうとして、失敗して転んでもいいと思っています。中高の6年間、学校にいるうちに、失敗できるときに、大いに失敗してほしいと思います。

本校には、男子校ならではの良さがあります。まだ中1、中2ではたどたどしい会話しかできない男子が、女子と一緒にできない失敗やチャレンジを重ねて、やがて大きく成長していく苗床のような存在であって男子校はよいと思っています。

仲間と一緒に課題に向き合い、互いの考えを分かり合ったりすることの楽しさを実感できると、男子は急に伸びていきます。中3にもなると、学校外の社会で堂々と、プレゼンできるまでに成長します。発表することが楽しくて、さらに結果が返ってきて面白い。そういう楽しさを一度経験すると、男子は一気に成長するのです。その大きな成長の原動力になるのは、やはりモチベーションと自己肯定感だと実感しています」と児浦先生。男子のダイナミックな成長と可能性に、児浦先生ご自身も目を見張ることがあるといいます。

「たとえば、聖学院では『SEIGMAN(本校キャラクター)シール』というものを作っていて、生徒が何か努力して評価されると1枚もらえるようになっていきます(笑)。幼稚と思われるかもしれませんが、この世代の男の子にとっては、こういう仕掛けも楽しみのひとつになり得るのです。いまの高2の生徒に過去に行った試みでもあるのですが、これでスイッチが入った生徒もいたほどです」と清水先生も言います。

「聖学院は伝統的に、面倒見が良い学校という評価を内外からされていました。その一環という意味もあって、3年前までは、英数国の成績が良くない生徒を、放課後補習で残してきました。しかし、それによって部活参加に支障が出たり、この年頃の男子に特有のプライドが傷ついたり、雰囲気が悪くなった面に私たちも気づいたので、居残り補習をやめて、自学自習主義にして、『自学自習ノート』を導入し、みな一律に勉強するのではなく、自分で学習メニューを決めてスケジュールを立てて学習する仕組みをつくったところ、かえって生徒の自宅学習の時間が伸びたのです。調査をすると、多くの生徒が平日に平均2時間程度、休日に4時間程度の学習をしているという結果が出ています。中2、中3になると、要領が良くなることから時間は少し短くなりますが…。つまり、やらされてやる

勉強は嫌だけれども、自分でやる気になってする勉強は楽しめるということなのです。

そしてある科目で成績が伸びると、他の科目でもがんばるようになります。こういう良いスパイラルが起きると、一人だけではなく、クラス全体に広がっていくことも、男子校の良さではないかと感じています。

そういう良い学力の成長カーブを実現するうえでも、6年間でいちばん大切なのは、やはり中1の1学期です。ですから保護者には、入学が決まった時や入学間もない時期に『いま決して手を抜かないでくださいね』と話しています」と清水先生。

ここでも、生徒の成長の原動力になるのは、一人ひとりの個性を認めて、それを伸ばすために、褒めて認めることだと聖学院の教師陣は考えているといいます。そのための良い雰囲気を共有したクラスづくり、学年づくり、学校づくりに注力しているのが、現在の聖学院の教育のあり方なのでしょう。

様々なプロジェクトを同時進行。 全体のストーリーを生徒の成長に結びつけ、 教員チームの結束と柔軟性が力に！

聖学院中高の教育が、この数年の間に非常に早いスピードで変化、進化していることには、どんな秘訣があるのでしょうか。

「学内でいくつものプロジェクトを同時に進めています。たとえば最近では、お隣の姉妹校の女子聖学院の生徒、先生方とのコラボレーションで、パラスポーツの応援を企画するプロジェクトなども行っています。

2010年からは、学外に積極的に出ていくプロジェクトも増えています。

もともと聖学院の先生方の教員力のレベルは高く、様々な取り組みが行われていたのですが、以前はそれが、教員個々の力によるものが多かったのです。それが最近では、聖学院の教育全体で縦横につなげて、生徒の成長のストーリーをしっかりと描いていける形で、教員全体のチーム力、授業力が高まったと感じています」と児浦先生も、聖学院の教員力を自負します。

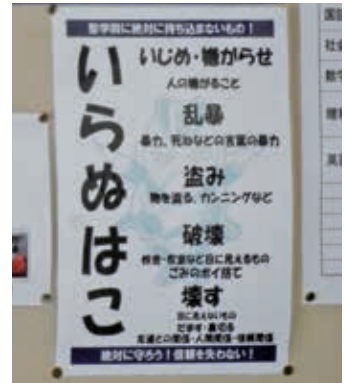
「たとえば宿泊を伴う体験学習でも、その縦横のつながりを教員がしっかり意識して共有することで、各プログラムの効果がさらに高まり、次につながっていきます。中3の糸魚川での農村体験学習も、中1、中2での授業や体験学習がしっかりできていることで、さらに多くの気づきや刺激を得られるようになったと思います。

そして中3からは社会的な課題にチャレンジしていきます。クエストカップへの出場や、中3～高2希望者を対象としたタイ研修旅行も、生徒はとても大きな刺激を受け、自分の将来の進路や生き方を考えるうえでも貴重な経験となっていると思います」と児浦先生

は、聖学院中高が一丸となって進めている多様な教育プロジェクトの手応えと可能性と話してくれました。

そして、こうした多様な授業や体験学習のプロジェクトを進めていくうえでも欠かせない、状態目標や評価の指標（ループリック）を学内で開発し、それを活用してきたことの大きな効果と確かな手ごたえも、児浦先生をはじめとした「21 教育企画部」の、のべ16名（教育企画4名、入試開発4名、国際教育8名）の先生方は感じているといいます。

この記事のための取材で聖学院をお訪ねした日、まだ入学から約半年の中学1年生の「L.L.T.」の授業を見学させていただきました。「L.L.T.」とは Lean Live Together の頭文字をとった、聖学院独自の「共に学び共に生きる精神を学ぶ」授業です。毎週



教室の前の掲示板に貼ってあった「いらぬはこ」ポスター。これらは「聖学院に絶対に持ち込まないもの！」。



取材で見せていただいた中1「L.L.T.」の授業と、その年間の組み立てをしている養護の小野祥先生(左)と聖書科・チャプレンの百武真由美先生(右)。

水曜日の3時間目に、この2学期は12回行われるといいます。

この授業のなかでは、「良い友達とは？」について、自分の意見や感じたままの答えを自らみつめ、それをグループやクラスで共有することで、互いの存在や価値観を尊重し、違いを認め合ったうえで、共に学んでいく仲間と安心してコミュニケーションや意見交換ができる場を形成していくための授業が行われていました。

でも、すでに半年間、聖学院での生活に馴染んできたからか、まだ中1の生徒であっても、何かクラス全体に、素直な、それでいて周囲の仲間への思いやりにも満ちた空気が生まれていたことが印象的でした。



聖学院独自の「21世紀型教育」のPPLを用いた探求型学習の実践例（左上から中1国語のスキット、右上が中2技術のレゴ®マインドストーム、左下が中3公民のクエストカップ全国大会出場、右下が高II現代社会の第二東京弁護士会との協働学習）。

私立中のなかでも先進的かつユニークな3種類の「思考力入試」をすでに導入し、子どもたちの多彩な資質・才能を評価！

ところで、この聖学院は、首都圏の私立中高一貫校のなかでもいち早く「思考力入試」を導入した学校としても注目されています。もともと同中学校は、男子校のなかでは最も早く「英語入試」を導入したという経緯を持つ先進的な私学でしたが、それまで実施してきた「思考力+計算力入試」と「思考力ものづくり入試」という2種類の思考力入試に加え、今春2018年からは「難関思考力入試」という新たな入試を新設して、3種類のユニークな思考力入試を実施しています。

来春2019年入試では、さらにこれらを進化させ、「ものづくり思考力入試」「M型思考力入試」「難関思考力入試」という名称で、3種類の思考力入試を行います。

もちろん、聖学院の中高一貫教育とその成果への評価が高まり、従来からの4科目・2科目入試の人気と難易度も年々上昇している同校ですが、このユニークな思考力入試は、中学受験の準備のための進学塾からだけではなく、多くの教育機関から注目され、広く知られるようになってきました。レゴブロックで課題に沿った作品を作らせ、その作品に込めた自分の考え方を150字×3題の記述でまとめさせる「思考力ものづくり入試」などは、最近の「中学入試の多様化」を象徴する入試形態と言ってもいいでしょう。

それは、従来の教科型の入試形態ではないものの、新たな評価軸で小学生の「考える力」や、潜在的な資質や可能性を測り、評価してくれるという意味で、今後の急速に変化する社会で求められる力や、2020年を境に大きく変わろうとしている今後の大学入試で求

められる力にもつながる入試です。

「当初は校内でも、こういう思考力入試の導入には賛否両論がありました。しかし、実施回数を重ねるにつれ、その入試で入学した生徒が、大きな成長を見せてくれたことが教員の自信にもつながりました。なかにはいま学年の成績トップ集団でがんばっている生徒もいるほどです。また、この思考力入試の導入によって、様々な学習歴や活動歴を持った受験生と出会うことができるようになったことも嬉しいことですね」と児浦先生。

一昨年の教員研修では、事務職の先生も含め、全教職員と一緒に、「レゴ®シリアスプレイ」のワークショップをして、そのメソッドを教育や入試に生かすことの意味も体験したといいます。

こうして、変わらぬキリスト教による人間教育をベースに、子どもたちが未来の新たな社会でより良く生きるための多様な力を、独自の「21世紀型教育」で育成してくれる聖学院中学校高等学校。海外の大学への進学実績なども含めて、その成果と進化に、大いに注目していただきたいと思います。



今春2018年入試から新設された「難関思考力入試」の風景。創意工夫の好きな「自ら学ぶ」ことのできる生徒がこの入試で入学してくれたという。